

個の思考を残し、全体の学びへとつなぐ 「マップ」の活用法と授業試案の提案 — 「マインドマップ」の音楽科への転用 —

初等教育教員養成課程 音楽選修 森智紗子

本研究は、トニー・ブザンが開発したマインドマップの「記憶力の向上」、「創造力の向上」、「脳のひらめきの強化」などの中心概念を生かした、小学校音楽科への、思考の積み重ねを視覚的に見える形で残す、個の思考を全体の思考に転換するなどのマップの具体的な活用法を提案しようとしたものである。

現在、マインドマップを学校教育の中に取り入れている例は、いくつも報告されている。音楽科でも活用されてはいるが、アイデアが有効に促進されている授業実践はほとんど見られなかった。そこで、思考の関連が希薄な音楽科へより適切に対応したマップの活用法を検討し、子どもの持つ力を可能な限り伸ばすことはできないかと考えるに至った。

第一章では、マインドマップについてまとめた。脳の仕組みとマインドマップの関係性を示し、マップを使うことの有効性を述べた。また、脳の力を最大限に活用するためのマインドマップの描き方のルールを整理するとともに、そのルールに沿って描かれたマインドマップの分析を行い、利点・欠点を明らかにした。

第二章では、マインドマップの概念を継承しつつも、新たなマッピング手法として提唱されているジェイミー・ナストの「アイデアマップ」と矢嶋美由希の「ふだん使いのマインドマップ」についてまとめた。ブザンとは異なる、提唱者のマインドマップに対する考え方を示し、その考えを基盤として提唱された各々のマップの描き方のルールを分析した。ブザンのマインドマップとの違いを明らかにするとともに、そのルールに沿って描かれたマップの分析を行った。

第三章では、第一章及び第二章をもとに、音楽科へより適切に対応したマップの活用法を検討し、授業試案を作成した。

本研究を通し、マップは使い方により、思考の積み重ねを視覚的に見える形で残したり、個の思考を全体の思考に転換したりするなど、様々に生かすことができることが明らかになった。しかし、その中で、マップをどのように使うかは、教師の判断に任される。明確な意図を定め、活用していくことが重要であると強く感じた。また、本論文は試案を提示するにとどまっている。今後、実践を通し、子どもの持つ力をできる限り伸ばすことができるよう、その一助としてのマップのより適切な活用法を探求し続けたい。